社会知性の開発をめざす 専修大学

ニュース専修 ウェブ版

2007年3月号

[2面]

【2006年度卒業・修了 記念特集】

定年退職される10人の先生方 キャンパスを去るにあたってのメッセージ

永い間ありがとうございました。―

校歌を力強く 歌い続けよう

経済学部教授 吉家 清次（きっか せいじ）

新学期目前にして主たるキャンパスは生田だと知り、大慌てで始まった私の「専修生活」もどうやら卒業を迎えることになった。39年間も専修人で過ごせたのは、優れた先輩や同僚の教職員たちの支援と、明るく屈託がない学生たちとの日々のお陰と感謝している。

会議が多く長く、その割にはことが進まない教授会、毎度のように気落ちさせられ続けた学年末テスト、等々。現役時代であれば、腹の立つ「思い出」は、早晩薄らぎ、やがてそれもこれも懐かしさに変わるはず。

この段階で言っておきたいことはただ一つ。卒業生たち、校歌を歌い続けてください。テープから流れる校歌を「聴くだけ」の卒業式はさびしい。大学で学んだこと（あるいは学び得なかったこと）を胸に、力強く校歌を歌って学生期を終え、社会人へと旅立ってほしい。それが時には励ましに、時には癒(いや)しとなって、君の長い人生を彩ってくれるものと思うから。

（在職39年。主な担当は比較経済システム論）

生涯の友となる「心友」を作ろう

法学部教授 本田 泰治（ほんだ やすはる）

7年間お世話になった専修大学を去るに当たり、私は学生諸君に次の三つのお願いをしたい。

最初に、約20年前になるだろうか、当時の故森口理事長が入学式で新入生に対して、達磨禅師の言葉を引用して次のような祝詞を述べられた。「この大学に入学して新しい友達が出来、それが親友、信友と進化して、生涯の友となる心友を是非つくってほしい」と。私はこの言葉が好きで講義の中で必ず紹介してきた。

次は目に見えぬ財産である校友の存在を意識してほしいということである。私は校友ではないが、学外の授業や調査研究活動の際に、多くの校友の方々にお世話になり感謝している。学生諸君も良い校友になれるように日々努力してほしい。

最後は一日も早く専修大学の校歌を覚えて、機会あるたびに胸を張って歌ってほしい。良い校歌だと思うし、そのことが母校愛にも繋がると思うからである。

（在籍47年、主な担当は健康科学論）

「思い出」多き ゼミ生との38年

経営学部教授 櫻井 通晴（さくらい みちはる）

専修大学に奉職して38年間、数多くの楽しい思い出ができた。好意溢れる教員、職員、およびすぐれた卒業生に恵まれた。教職員と卒業生の皆様に、心より感謝申し上げます。

ゼミ生とのコンパ、公認会計士試験の指導、毎夏のゼミ合宿、ゼミでのボウリング大会、スキー合宿、修善寺や石和への教員旅行、教員テニス大会、大学院生と教職にあるゼミ卒業生の指導、翻訳を通じての合宿、博士号学位論文の厳しい指導などが思い出に残っている。

この38年間、ゼミ卒業生から数多くの公認会計士、税理士、国税専門官を輩出した。公認会計士試験委員を務めた間にゼミ生から3年連続で2人ずつの合格者を出したことも忘れられない。ゼミ生から現在20年の大学教員、7人の博士を輩出したことも思い出に残る。

このような楽しい思い出を残させてくれた専修大学の教職員とゼミ卒業生の全員に、心からのお礼を申し上げたいと思う。

（在職38年。主な担当は会計学総論）

「善意の実行」座右に生きる

経営学部教授 加藤 克己（かとう かつみ）

少年のころ、「座右の銘」ということばを仕入れてきて、父に銘をねだった。父は数日後に「新聞から拾ってきた」といいながら「まず実行」という銘をくれた。ぼくはこの単純なことばを銘として机上に置いた。実行には結果として責任がともなった。賢明な父はそれを承知だったろう。ぼくは座右の銘の拘束を受けて生きた。

大学進学の直前に「善意のひと」が逝った。トーマス・マンの訃報を載せた紙面は強烈な影響を残した。銘の実行の基準が必要だと考えていたぼくは「善意」を躊躇なくいただいた。「座右の銘」は「善意の実行」となった。もちろんぼくの心底に発する善意であり、きわめて独善的なものである。しかし独善にも実行結果の責任はともなう。独善を貫いて許されるいきかたが肝腎だった。

専修大学はぼくの独善を許してくれた。加えて素晴らしい後進を朋として配してくれた。いまもぼくは専修大学の全国網のひとつの要になっている。

（在職44年。主な担当はドイツ語）

時間は有限だが 希望は無限だ

商学部教授 松原 成美（まつばら しげみ）

私が本学に赴任したのは、昭和43年4月のことであり、商学部に会計学科が新設された年であった。本学が、古く「計理専修」と呼ばれていたことはよく承知していたから、その伝統を引き継ごうという使命感に燃え、学生諸君を指導してきた。結果、40年弱の間に、ゼミ生480余人を社会に送り出し、そのうち126人が職業会計人として全国各地で活躍してくれているのは大変嬉しく、誇りに思っている。

ゼミの諸君とは、年一回刊行する機関紙『絆』によって今でも交流が続いているが、在職中の思い出としては、他にも長年部長を務めた準硬式野球部の諸君との交流も忘れ難い。専修大学を「卒業」するにあたり、かつての同僚も含めて、得難い時間を共有した教職員諸氏に深く感謝するとともに、若い学生諸君には、最後に次のような言葉を贈りたい。「目的を持って学び、その目標に向かって努力せよ。時間は有限だが、希望は無限だ」

（在職39年、主な担当科目は財務会計論）

報恩奉仕生きる ボランティア

商学部教授 飯田 謙一（いいだ けんいち）

私のゼミナールのテーマが「日本企業の海外経営と日本企業の国際化」であった関係で、在タイ日系企業の協力をえて、長年夏季や冬季などの長期休暇を利用し、2週間の海外企業研修を実施してきた。この研修期間中の1週間、タイ東北地方の寒村に行き、現地小学校の建設や補修工事などを、現地の寺院や民家に宿泊し村の人達と協力して行ってきた。慣れない土地で泥だらけになり、汗を流して行った土木工事の思い出は、ゼミナール学生にとって、生涯忘れられない思い出となっているようである。

さて、昨今、専修大学でも多数の学生が国内外のボランティア活動を活発に行っているようで、彼らはその時の貴重な体験に感動を交え、目を輝かせて話をしてくれる。学生達のボランティア活動の背景には、本学の建学の精神である「社会に対する報恩奉仕」が十分に生かされていると考え、私は大変嬉しく思っている。

（在籍25年。主な担当は国際経営論）

卒論仕上げた 笑顔忘れない

文学部教授 青木美智男（あおき みちお）

10年、早いものである。あっという間に生田の山の上での研究と教育の生活が過ぎていった。最初の授業で、専修大学の学生たちが、なんと素晴らしいのだろうと思った。これなら教え甲斐がある、と胸をはずませた。間違いなかった。10年間変わることはなかった。期待がすごく大きいから、授業をさぼったり、学習に身の入らない学生諸君には、たまらず大きな声で怒鳴りまくった。でも皆ついてきてくれた。一生懸命に卒論に挑戦してくれた。完成した時のあの笑顔が忘れられない。

4月からこんなことをしないで済むと思うとほっとする。パソコンに向かい、せっせと原稿を書く毎日が待っている。しかし思うように進まない。今度はそんな自分を、アホ、バカヤローと怒鳴る日々が続くだろうと思っている。

（在職10年、主な担当科目は日本文化史）

歳と共に変わる「生き甲斐」

商学部教授 壽崎 雅夫（すさき まさお）

人間、誰しも充実した人生を送りたいと願っている。充実した人生とは、自分で「生き甲斐」を実感できる人生のことだ。

「生き甲斐」を何に求めるかは、人によって異なる。また「生き甲斐」は歳（とし）相応に変化すべきものだ。

社会人になったら、まず経済的自立を目指して、仕事の中に「働き甲斐」を見つけ出したい。経済的自立なしには、好きな相手と結婚もできないからだ。

結婚し子供を授かると、家庭を夫人に任せっきりで「働き甲斐」だけを求める夫が増えてくる。仕事に油が乗り、家庭の収入増にもつながると思うからだ。

ところがここに思わぬ落とし穴がある。夫＝父親の家族との会話、団欒（だんらん）が欠落し「家族の幸せ」が失われてしまう可能性があるのだ。

明るい家庭があれば、次代を背負う子供達は、素直に明るく育っていく。私にとっての「生き甲斐」は、「家族の幸せ」の中にある。

（在職14年。主な担当は国際金融論）

情報化社会での 活躍を期待する

ネットワーク情報学部教授 坂本 實（さかもと みのる）

本学は1962年に、数学とコンピュータに強い人材を目指して「経営学部」を設置し、1972年には、文化系でコンピュータを学ぶ我が国最初の「情報管理学科」を開設した。

私は1974年に発足間もないこの「情管」の教員として入職した。さらに2001年、ネットワーク情報学部に改組、発展し、私も同学部に移籍した。他に先駆けて導入し、更新を重ねてきた電子計算機施設は、1982年に全学的機関「情報科学センター」へと発展。このように本学は、情報化社会での専門と同時に、基本的事項を習得できるよう努力してきた。

23年間、これらのことに協力させていただいた私は、今春定年で退職する。科目「卒業研究」、「プロジェクト」での学生諸君の熱心な勉学、活発なチーム活動も思い出となるだろう。恵まれた環境で学んだ諸君が情報化社会で立派な活躍をされるよう期待したい。

（在職33年、主な担当科目は数学モデル）

環境の変化を チャンスとしよう

文学部助教授 柳瀬 訓（やなせ さとす）

この冬の東京は近代的な気象観測が行われて以来初めて、降雪を記録しない暖冬となるなど、このところ日本や世界各地の異常気象やそれが原因で発生した災害などに関する話題が多い。

1980年代から顕在化してきた地球規模の環境の変化もこのように身近に体感されるようになりつつある。私たちの周りには、また、少子高齢化社会の出現から派生する社会的な環境問題なども迫ってきている。そしてこのような環境の変化が大学で学ぶ者にも直接、間接に影響する時代である。

環境とは、周りの世界と相互に作用を及ぼし合う状態をいいます。このような周辺の環境の変化は自分自身が、よりよい方向に変化していく大きなチャンスととらえて皆さんがますます発展されることを願っています。

（在職17年。主な担当は測量学）

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.